

なんて声をかける手口は初耳だわ」

「いや、ナンパとかそういうのじゃなくて……ホントごめんなさい」

口調をあえて素のままにしてみたらかかってきた。案の定謝るのに必死で私の口調とかそのあたりに疑問を感じる余裕もないみたい。後から疑問に思っただろうけど……だからこそ、畳み掛けるなら今。

「あなたのお姉ちゃんとかやらがどんな人かは知らないけど……あなたが私に興味があるのは事実なのかな？」

「いや、あの……そういう事じゃなくて……」

慌ててる慌ててる。私は心中でクスクス笑いながら、攻撃の手をゆるめることなく言葉を続ける。

「まあ、どっちでもいいわ。折角いい男に声かけられたんだし、乗ってあげても良いよ？」
「えっ!？」

男が幼女に声をかけ、幼女がそれに応じる。普通ならあり得ないシチュエーションに、更なる混乱が彼の脳内で渦巻いているはずだ。でも流石にこの男も少しづつ冷静になり始めてきたかな。ならそろそろ決めちゃわないと。

「付き合ってあげるって言ってるの。まさか自分から声をかけといて、こんな可愛い子をほったらかしにする気？」

顔を赤らめ狼狽えている。なかなか可愛いなコイツ……からかいがあるというか、一つ一つの反応が見ていて楽しい……ああ、やっぱり私ってSだね。今更自覚する事じゃないけどさ。

「その、本当にごめんなさい。これから人と待ち合わせがあって、その……」

なるほど、暇を持て余していたわけではないようだ。突然声をかけた非礼だけでなく、私の好意を受け取れない事に対する無礼に、男は戸惑い困り果てている。どうやらこの男、気が弱いだけでなく律儀な性格でもあるようだ。先約との約束と私の誘いとで板挟みに遭いあたふたしているこの姿を見ていれば誰にでも判る。

「ま、それならいいわ……はい、これ」

私はそっと、一枚の名刺を差し出した。

「こっ、これは？」

戸惑いながらも、男は私が小さな手で懸命に上へと突き出しているその名刺を受け取った。

「この近くにあるメイド喫茶よ。「リリム館」って知ってる？ 私そこでウエイトレスしてるから、遊びに来てよ。場所はそこに書いてあるからさ。じゃ、絶対来てよ？」

私は返答を待たずに歩き出した。男の名前も聞かず、名刺も交換せず。もつとも、彼が名刺を持っているような歳なのかどうかは微妙なところだけど……少なくとも、気が弱く律儀そうな彼なら、この「餌」に絶対食らいつくはず。たぶんまだ戸惑っているだろう彼の方を振り返ることなく、私はその場を去った。周囲に満面の笑みを振りまきながら。

昼のこともあって、私は上機嫌だった。それが油断を招いたのか……らしくないミス^ミスを犯してしまった。昼間の彼が夜店に来る可能性は充分にあったから、私はあえてじらすた

めに店に顔を出さず、今日は狩りをしようといつもの裏道で罾を張っていた。その罾に掛かった男達が、問題だった。

「お嬢さん、名前……教えてくれないかな？」

私は今、不本意ながら男達に「職務質問」というものをされている。二人の男達が私に見せた物は「補導員」の証明書。屈み込み、視線を私に合わせ語りかける、優しげに見える男。私はと言うと……怖がる素振りを見せ、黙秘を貫いている。

さてと……どうしたものか。

夜の繁華街。その脇道で一人たたずむ少女がいれば、補導員が声をかけるのは当然だろう。しかもこの通りは、知る人こそ知る通り。男達が「春」を買いに訪れる通りだ。そんな場所に少女が立っていれば、ますます放つては置けない。

「怖がらなくても良いんだよ」

私の頭を撫でようとすると、もう一人の男。私は頭で軽く手を払い、拒絶する。よほど怯えているのだろう……と思わせる為に。

繁華街には、様々な人々が集まる。故に補導員や警官も巡回を頻繁に行う。そんな事、私は百も承知。だからこそ、補導員や警官らしき者が近づいた時はすぐに身を隠す。獲物と補導員くらい、「雰囲気」で区別出来る。少なくとも私には、それを察する「力」がある。私は長い年月「少女」で居続けている、モンゴルの妖怪なのだから。その私が、この男達を補導員と気付かないなんて。何といつつまらないミスを犯したのだろうか。

「違うのかな……」

ぼそりと、頭を撫でようとした男が呟いた。何と比べて違うというのか？ なんかおかしいなこの男達……私は薄々気付き始めた。

私がこの男達を補導員と気付かなかった理由。一つは、獲物と勘違いした為。この道は女を買いに来る獲物が少年少女を保護する補導員か、あるいはただの通行人が通っていく。私はこの二人を見かけた時に、獲物だと思った。さっきも言ったように「雰囲気」が完全に獲物のものだっし、なにより普段このあたりを周回している補導員なら私は顔を覚えていた。新人だとしても、二人いれば普通どちらかはベテランだろう。二人とも新人というのは考えづらい。

しかし、彼らは補導員だった。私に見せた証明書が偽物でなければ。

「いや……噂が確かなら……」

しゃがんでいた男が立ち上がり、小声で疑問を持った男に話しかけた。私に聞こえないよう話しているつもりだろうが、彼らにとって残念な事だけど、私の耳はその話し声を聞き取っている。怯えた振りをしながら、冷静に。視線を落とし、私は屈み込んだ。むろん怯える演出なのだが、この間に私は情報を整理し冷静に判断を付けた。

噂か。これで疑問に答えが示された。小学生くらいの少女が、売春行為をしている。おそらくそんな噂が流れていたのだろう。同じ「狩り場」で狩りを続けていたが、噂が立つ事はないと私は甘い考えに捕らわれていた。何故ならば、獲物の全てが罪悪感と屈辱感を抱える為、わざわざそれを人に話す事がないと高をくくっていたから。売春そのものは当然犯罪だが、相手が少女ならその罪はもっと重くなる。加えて、全ての獲物は「事」が終わった後に全財産からホテル代を除いて全て私に奪われている。これは獲物当人にしてみれば屈辱になるはずだ。

そんな醜態を、人に晒すものか？ 確かに、「普通の」獲物……当人はそうかも知れない。だが同じ場所で客を狩り、ホテルに向かう事を繰り返せば、第三者……他の目撃者が「噂」をし始めてもおかしくない。ついでに言えば、己の醜態を晒してでも、私との情事を「ロリコン仲間」に自慢する輩がいけないとも限らない。

長く居続けすぎた。それが私のミスだ。今更冷静に全てを把握したとしても、もう遅いんだけどね。

「大丈夫だよ。お兄さん達は怖い人じゃないから」

怖いかどうかは問題ではない。捕まる事自体が問題なのだ。さて……逃げるか？ いや、それは難しい。残念ながら、私は少女……人間の少女と同じ背格好。逃げ出したところで、大人の男二人を振り切る事は出来そうにない。今立っている通り自体が細道である事もあり、他に逃げ込めそうな道はない。左右を挟まれている以上、逃げるといふ選択肢は排除すべきだ。

では……ここは「とりあえず」大人しく補導されておこうか。事情聴取が始まったところで、「保護者」を呼び出せば……その保護者がどうにかするだろう。貸しを作るのは面白くないが、事を荒立てるのは望まない。それにこれも、あの学者先生の仕事だろ。取引を交わした以上たまには働いて貰わないとね。さてと……そうと決まれば、それまでは大人しく「怯える少女」を演じておくとするか。

「なあ……」

立ったままでいる男が、しゃがんでいる男に声をかけ立たせた……ん？ なにやら、様子がおかしいが？

「いいんじゃないかねえか？ 噂通りだとしてもそうじゃねえとしても……こんな所にいるんだ。無理に連れていっても」

筋が通っていそうで、補導員としては少々荒っぽい内容。

「そうだな……まあ嫌がるのを無理矢理……つてのも悪くないな」

下卑た笑い声が漏れ聞こえる。もしかしたら、聞こえるように笑っているのか？ この展開は……そういう事なのか？

「ねえお嬢ちゃん」

うずくまる私に、再びしゃがみ込み男が声をかける。私は様子を見る為に、顔を上げずただ黙り続けた。根気強い補導員なら、優しい言葉で何度も呼びかけるだろう。

「ちっ、めんどくせえ。ほら、顔を上げろよ！」

ぐつと私の髪を掴み、強引に顔を上げさせた。驚く私に、男は白い布を口と鼻に押し当てた。この臭いは……クロロホルム。何とも古い手を使う。これで確信出来た。私に見せた補導員の証明書が本物かどうかは判らないが、少なくとも、こいつらは真っ当ではない。私はクロロホルムを嗅がされた事で、深い眠りにつく……ふりをした。

カチャカチャと、私の手首に手枷をはめている男達。寝たぶりをしている私は自分の状況を目視出来ないが、音と感触でおおよその状況は解る。

私は今、どこかの一室に連れ込まれ、手枷足枷、ご丁寧に首輪まで付けられ、鎖でどこかに繋がられた様子。

予想通り、この手の「趣向」の持ち主らしい。それも、本格的。手枷はガツチリとハンドリストのようにはめるタイプで、手錠とは異なる。首輪も感触から、ペットシヨップで売られているような物ではなく、ラバー制の人間用。何より、手つきが慣れている。

私は自分の「ミス」そのものに多少誤りがある事も確信した。同じ狩り場で続けすぎたミスは変わらないが、補導員を獲物と勘違いした、というミスでは無かったようだ。こいつらはやはり獲物だ。それもかなり質の悪い。獲物が皆少女を買うような連中だけに「正常」というのは望めないが、少なくともここまで「異常」では無かった。その差を察することが出来なかったのは、やはりちよつと昼間のことで浮かれすぎていたせいかな。

しかしこれはこれで、面白い展開になってきたんじゃない？ 私はほくそ笑んだ。むろん顔に出さず心中で。

「そろそろ起きるんじゃないか？」

男の声で、私はそろそろ起きる時間なのかと知らされた。臭いこそ知ってはいたが、クロホルムの性質を熟知しているわけではない。いつまで寝たふりを続けるべきか悩んでいたが、今が良い頃合いのようだ。私は少しだけ間を開け、ゆつくりと目を開けた。

「……なに、ここ……えっ、なに？ おじさん達……え、ここどこ？ なんなの？」

誘惑する演技には自信があるが、こうして混乱するふりをしたのは初めて。ちよつとこの演技に自信が無かったのだが、ニヤニヤする裸の男達の反応を見る限り、問題はなかったようだ。

判つてはいるが、一応目視で自分が置かれた状況の再確認をする。私は裸で、手と足、そして首を枷で封じられている。足の開閉は出来るが、手は拳二つ分程度の余裕だけで繋がっている。後ろ手にされていないので姿勢としてはそんなに苦しくはない。男達も私同様既に裸になっており、一人の男の手には私に繋がっている鎖が握られていた。

「おはよう、お嬢さん」

鎖を持った男が、わざとらしい挨拶をしてきた。ああ、今まで会ったどの獲物よりも下卑た顔をするな。私は顔で怯え心で見下した。少女との性交という快樂以上に、背徳行為に酔いしれるタイプの獲物はこのようなくどく下卑た顔を作っていたが……私がこれまで見てきた中で、目の前の男二人が最も酷い。それほど、今このシチュエーションが気に入りにのたろう。

「なにこれ！ いや、外して！ なんなの！ おじさん達……」

私が身をよじり出来もしない手枷外しに懸命な姿をさらす事で、男達はますます顔を歪ませている。

「それは出来ないねえ、お嬢ちゃん」

ゆつくりと近づく男達。私は顔を引きつらせ、身を縮こめてみせた。

「キミはね、これから俺達の「奴隷」になるのさ」

ああ、やはり。奴隷という言葉に酔っている男達とは正反対に、私は呆れていた。昨日までは私が男達を奴隷として扱っていたが、アレは彼らが望んでいたこと。今私は奴隷になることなんて望んでいない。むろんこの屑野郎どもが私の事情を知るはずもないが、彼らにとつて私がどう思うかなどかまいはしないはずだ。

どうしようもない連中……呆れきり醒めている私は、男が続ける言葉を予測した。この男はこう言うだろう。「俺達の事は」「主人様」と呼ぶんだ、とね。

「俺達の事は「ご主人様」と呼ぶんだ」

ほらね。この手の男達が何を考えているかなど、容易い。まったく、何がご主人様だ。主従関係というものは、信頼という絆で結ばれるもの。ご主人様など強制して呼ばせるものではない。私に「従属心」など無いから感情で理解は出来ないが、強引に従わせては真の主従関係は築けない事くらいは理解できる。まあ、むろん「女王たん」である私は自分のことを棚上げしてるけどそんな小さな事は気にしない。

あれだな……たぶんこいつら、強引にでもご主人様と呼ばせ私を四六時中犯し続けていれば従順な奴隷になるとも思っているのだろう。バカバカしい。どこのエロ小説だよ。そんなこと現実でも出来ると思ってるのか？

「ど……どれい？ ご主人様って、そんな……」

ま、そんな私の感情はさておいて……とりあえず、「突然の事に理解出来ず怯える少女」の演技はこんなところで良いのかな？ クックと笑う馬鹿どもの反応を見る限り、これで正解だったみたい。

「毎日毎日、俺達と犯りまくるのさ。股が乾く事もないくらいになあ！」

「うわー、ひねりも品も無い台詞なこと。」

「そんな……いや、放して！」

ここで私は、暴れてみた。この手の連中は大人しくされるより暴れられた方が「やり甲斐」を感じそうなので。

「ジタバタするな！」

私の首に繋がっている鎖を持ち上げ、男がすごんだ。息苦しさに、私は動きを止めた。

「いや……いやあ……帰して、お家に帰して……」

涙を流しながら懇願こんがんしてみせる。帰る家なんて私にはないけど。

「そうだな……大人しく言う事を聞いていれば、そのうち帰してやるよ」

嘘つき。そんな気などさらさら無いくせによくもまあ。

「ほっ、本当に？」

すぐる思いで、尋ね返す。男達が求めている反応はこんな所だろう。

「ああ、約束する。だから言う事を聞け」

ふむ……ちよつと安直過ぎる気もする。こんな事で、本当に人間のごく普通の少女は言う事を聞くのだろうか？ 弱者ではない私は弱者の心理を理解出来ないが、人間の少女を理解するよりも、この男達を満足させる事を意識した方が良いのだろう。だとしたら、彼らの望む「スムーズな展開」に乗るとしようか。私は黙って、何度も何度も頷く事で、彼らの「シナリオ」を進める事にした。

「よし、良い子だ。じゃあまずは……コイツをしゃぶれ」

男達は自分達の股間を私の顔に近づけ、肉棒を見せつけた。これまでのやりとりで興奮していたのだろう。完全ではないが既に肉棒は反り返っている。ここで「しゃぶる」の意味を理解出来ない、ウブな少女を演じようかとも思ったが、こいつらは、私が「噂の少女」だと承知で誘拐している。ならばあまり回りくどい事はせず、楽しんだ方が良いかもしれない。私は恐る恐る唇を肉棒へ寄せながら、さてどう攻めてやるうかと考えあぐねた。ここ最近、獲物相手には「少女」を演じ続けたし、客相手には「女王たん」を演じ続けているし……久しく全力で楽しんでないなあ。なら、ここは一つ……。

「なっ、なんだコイツ……」

舌先を尿道入り口に突き刺すよう押し当てながら、ゆっくりと口内へと肉棒を誘い込む。充分に誘い込んだところで、私は唇を閉じる。口内では舌先で肉棒の中をほじろつかという勢いで、グリグリと押し込む。しばし後に、私は舌を肉棒の舌に潜り込ませ、口内で回すように舐め回した。

「うっ、ちよっ、ちよっと待て……」

待つつもりなど無い。私は相手の反応を楽しみながら、今度は顔ごと口を動かし肉棒を唇でしごく。その間も、舌は絡みつくように肉棒から離さない。

「やべ、もう……うっ！」

急に、鈴口から勢いよく飛び出す液。私は肉棒からすぐに口を離し、白く粘った液体を咳き込みながら吐き出した。

早すぎる……またか。私は自由の身ならガツクリと肩を落としたところだ。誘拐までするような男だから、もう少し楽しませてくれると期待していたんだけど……所詮ターゲットがか弱い少女という根性無し。この程度か。

「お前、早すぎるだろ」

「っさいなあ。ならお前やられてみる」

間抜けなやりとりだなと思いつつ、咳き込み続け気付かないふりをしていた私。そんな私に突きつけられる肉棒。顔を上げると、手で肉棒を押さえている男が私の頬に肉棒をぴちぴちと押し当て急かした。この男も同じようなものだろうな。諦めた私は、ならば色々「数」を楽しむ事にしよう、先ほどの男とは趣向を変えてみる事にする。肉棒の先からではなく、まずはその付け根、そこにぶら下がる陰囊ふくりから。

「おお！」

驚く男を尻目に、私は小さな口で袋の片側、玉を一つだけ口に含み、舌でなめ回す。そして自由のきかない手で肉棒を掴み、強く早くしごく。手は中指だけ折り曲げて握っている。こつする事で、普通に握るよりも強い刺激が部分的に与えられる。下手をすると、このやり方は痛いだけになる。だが少女の私にそんな強い握力はないし、加減かへんくらいは心得ている。

案の定、この男も早々に果てた。

「はあはあ……そんな……」

快楽には満足したが、短すぎる快楽に不満と情けなさが入り交じっているのだろう。

「あつ、あの……これで許して貰えるんですか？」

私は「弱い立場」のまま、男達を挑発した。

「そつ、そんなわけないだろ！」

怒れる男はまた鎖を持ち上げ私を苦しめる。こつしないと、自分の立場を保てないのだ。少女相手になんと無様か。

「これからだよ、お楽しみはな！」

そうあって欲しいものだ。私は怯えた目を向けながら期待に瞳を輝かせた。男は私を押し倒し、強引に足をぐいつと広げる。

「ん？ なんだコイツ……」

露わになる私の「股」は、既にたっぷりと濡れていた。今までにないシチュエーション

に興奮していたのは、なにも男達だけではなかったということ。淫魔じゃなくてもこれくらいの準備は私にだって出来る。

「へへっ、コイツ、俺達のを舐めながら期待していやがったな。もうこんなになつてるじやねえか」

ぐちぐちぐちになった私の股間に手を伸ばし、秘部を指でなぞる男。触れられた事で、私はピクリと身体を反応させる。

「いやあ……」

こんなにしてまで恥ずかしがるのもおかしい話だが、その方が男を「燃えさせる」だろう。ん？「萌えさせる」と言うべきか？まあどちらでも良い。私を満足させてくれるのなら。

「何を今更嫌がつてんだ。この淫乱奴隷が」

私は不自由な手で顔を隠し、言葉攻めを受け入れる。

「こいつ、もう調教受けてたんじゃねえか？ さっきのアレだつて上手すぎるだろ」

ああ、そう思われるか。それは……まあそつか。さてどうしようかな……この男達が「初物」にこだわるタイプかどうかで、この後私がする対応が変わるんだけど。

「そつ、そんな事はない……です」

男の言葉が言葉攻めのつもりだったのか確認するつもりだったのか……どちらにせよ、否定した方が無難だろう。

「へっ、あれだけの事をして、今更カマトトぶつてんじゃねえよ」

どうやら、言葉攻めを楽しんでいるだけのようだ。そもそも、私がああ「狩り場」に立っていた事で、彼らは私を初めから「淫乱少女」と決めつけていただろう。だとすれば、調教済みかどうかはあまり関係がないのかもしれない。

「おい、今まで何人の男と寝たんだけ？」

さて、どう答えよう？ まあ言葉攻めのつもりならば……

「さつ……三人……です」

かなり少なく見積もった。

「嘘付け！ 三十人の間違いだろ！」

また鎖で私の首をぐつと持ち上げ、男が怒鳴る。

「はっ、はい……ごめんなさい、三十人で……す」

本当のところ、三十でも足りないと思うが……流石にそこを馬鹿正直に答える必要はないし、何よりいちいち数えてないし。とりあえず三十人よりは多いはずだけどね。

「はっ、さすが売女ばいどだな。こんな歳で随分とやりまくってるじゃねえか」

調子が出てきたのか、男達は自分達の優位を見せつける事で満足と興奮を得始めているようだ。

「おい売女。そろそろ欲しいんじゃねえか？」

今度は指を二本、男は秘所の入り口をまさぐるように突き入れる。

「あつ……そ、そんな事……」

「こんなに濡らして、説得力がねえだろ？」

ぐつと、指に力を入れる。私はそれに大げさな程反応して見せた。

「ほっ、欲しい……です」

実際、私はいい加減このくだらない言葉遊びに飽きてきた。そろそろ次を楽しみたい。

「なら、ちゃんとおねだりして見せる」

卑猥な懇願を期待する男達。私は飽きてはいたが、男達をより興奮させる為に、彼らの望む的からは少しはずした懇願を試みせる。

「私の……こ、ここに……入れて、くだ……さい」

「そうじゃねえだろ！」

興奮した男は、もう力の加減が効かないらしい。力一杯、私の首を鎖でぐつと持ち上げた。

「お前は俺達の奴隷で、俺達はお前様だ。なら、言い方ってもんがあるだろ？」

その答えを、年端もいかぬ少女に想像させ答えると？ 普通なら無理な話だが、そこまでリアリティーにこだわる事もないか。彼らにしてみれば、そうだな……アダルトゲームでもしている気分なのだろう。あの、理不尽で強引な、そして都合主義の展開を望みなら、リアリティーよりもテンポの良さと「萌え」要素が重要か。

「わっ、私は、どうしようもなく淫乱な奴隷……です。どうか、お前様……その、固く……て、大きい、その、たくましいおチンチンで、淫乱な奴隷の、お、おまんこ……を、お楽しみ、くだ……さい」

我ながら、なんて台詞だろう。普通の少女なら羞恥心で恥ずかしいのだろうが、私は別の意味で恥ずかしい。よくもこんな台詞を言えたものだ。しかし効果はあったようで、男達の「たくましいおチンチン」は限界にまで反り返り、息もかなり荒い。何かお主人様らしい事を言うのかと思っていたが、我慢出来なかったようだ。リーダー格の鎖を持った男が、飛びつくように私の淫唇に腰を押し当て、それなりに固いが貧弱な肉棒を突き入れた。

「あはあ！」

私は声を上げ、それを迎え入れる。

「あ、ん、そん、な……は、激し、く……あん、はあ！」

狂ったように動かされる、自称お主人様の腰。まるで軽いダッチワイフを弄ぶように、小さな私の身体を簡単に持ち上げ荒々しく扱ってくる。その扱いはぞんざいだ、これくらい荒々しい方が私も嬉しいのだから問題なし。というよりは、テクニクを求められないならこれくらい荒々しくないと私が楽しめない。

「おっ、おい。俺にも楽しませるよ」

出遅れたもう一人の男が、抗議の声を上げた。

「うるせえ、黙ってる！」

気の利いた言葉も出せない程、男は私に夢中だ。だけど心配はいらない。そう待つ事もないだろうから。

「くっ、もう……うっ！」

腰の動きが止まり、強く私に押しつけている。ドクドクと熱い私の糧が流し込まれていく。本当に早いなあ……予想通りだけどガツカリね。

「どけっ！ 次は俺だ！」

まるで奪われたお気に入りのお人形を取り返すように、待っていた男は私を強引にはぎ取り、自分の前に連れ出した。

「お主人様、今度はこちらの……ああ！」

どうせなら次は別の穴をと思い、私は演技もせずに自ら尻を男に向けた。興奮しきっている男は積極的になった私に何の疑問も感じることなく、そして口上を最後まで聞かずに、もう一方の穴……アナルへと肉棒を突き入れる。

「いい、いい！ お尻、おしりいい！」

この男達、一回一回が短い。そこで私は、声を出す事で自らを興奮させ出来る限り一回一回から快楽を得ようと懸命になった。もう、この男達はやる事しか頭がない。演技をする必要もないだろう。

「奥まで届いてる、届いてる！ 良いよ、すご……ふっっ！」

不意に、私の口に何かが押し込まれた。先ほど果てたばかりの男だ。途切れる事を嫌うかのように、この男も快楽を求め続けている。

「クチュ、チュ……は、あはあ！ 美味しいよあ……んっ、んチュ……いい、気持ちいい、あん、チュツ、クチュツ……」

完全に私の色香にやられた男達。果てては突き入れ、動かしては出す。それを幾度も幾度も繰り返す。

「くそ、なんだこいつ……尻が吸い付いてきやがる」

「口も……くっ、舌も、こいつなんなんだ……」

色々疑問を感じて当然だ。怪しんで当然だ。心のどこかで、不安すら感じているはずだか。だけど、離れようとはしない。むしろ離すまいと、必死に腰を振り、幼女という熟女にむしゃぶりつく。そしてまた大量に放たれる白濁液。私はそれを喉と腸で飲み尽くす。

「ご主人様あ……今度はこつちとこつちでお願いしますっ」

お尻を突き上げ、手で淫唇を広げ、二本の肉棒をそれぞれにねだる。無言のまま男達は一気に突き入れてきた。

「んっ！ いい、中でコリコリ、ゴリゴリ、擦れてるのが判るの……ん、いい、気持ちいいですご主人様あ」

前後を乱暴にかき回されながら、私はこの激しさを楽しんだ。男達とはいえば完全に我を忘れ、小さな私を奪い合うようにがっちり掴み、ただただ腰を激しく振るばかり。そこに愛情なんかまるでなく、テクニクも当然、理性だつて一欠片ひとかけらさえない。ただ本能に突き動かされ、快楽だけを求める野獣がいるだけ。

私は淫魔とは違う。だけれども、淫魔と同じように男達を夢中にさせることくらいは出来る。これがその成果つてとこね。

「あっ、出た、出てる……ビクビクしてるっ……ん、あん！ また、い、もつと、ねえ、激しくっ」

無言のまま放ち、そしてまた腰を動かす。男達に出来ることは、もうそれだけだった。

「もつと、もつとあ！ ちょうだい、もつとちょうだい！」

私は久しぶりに全力で、「狩り」を楽しんでいる。

「つたく、この役立たずども！」

結局、完全に私を満足させるに至らなかった男達。二人がかりでこの程度か。まさに精も根もを使い切り、気絶するまで腰を動かした二人の男。そんな性格的にも体力的に

も技術的にもどうしようもないゲスな男達を目の前に、私はこの行き場のない怒りと達しきれなかった興奮を持って余していた。

「勢いだけじゃダメかあ……」

激しければどうにかなると思っていたんだけど……それだけだとダメね。なんというか、何事もかんきゆう緩急かんきゆうって大事なんだなあということ学びましたよ今日は。こいつらの事とか、こいつらを呼び寄せてしまったミスとか、色々。

「……さて、どうしようかしら」

高まる感情をなんとか押しとどめ、私はこいつらの「処理」と今後をどうすべきか悩んでいた。

「もう、あの狩り場は使えないし……」

こんな男達にまで広まった噂。もう、あの狩り場で狩りは続けられない。そう考えると、ここで「騒ぎ」が起きてても問題ないだろう。しかもここはいつものラブホテルではない。厳密にここがどこかは判らないが、この男達が「犯罪」に幾度も使用していた場所だろう。ならば、ここで「変死体」が発見されても、世間を大きく騒がせても同情される事はないし、むしろ社会貢献になる。

ならば久しぶりに、「メインディッシュ」を頂くのも悪くはない。

メインディッシュ、それはもちろん、この男達の脳髓。

私は元来、誘惑して近寄ってきた男達の脳髓を喰らう妖怪。だが私は……ちよつとした気まぐれで、それを控えていた。あの学者先生との約束だとか、正直守る必要なんて本当はないはず。そう、単なる気まぐれ。ここでこいつらの脳髓を喰らう事に、後ろめたさなど感じる必要はないのだ。

「そうね……久しぶりに、いただきますか」

私は鳥の姿へ身を変え、クチバシで頭蓋骨をたたき割ろう……としたその時、音が鳴った。私の携帯の呼び出し音。

こんな時に誰だ？ 私はタイミングを外された不機嫌さを隠すことなく、電話に出た。相手は……これもまた図つたように、先ほどからチラチラと脳裏に出てきた自称保護者その人だった。

「もしもし！ えっ！ うん……え？ うん……ああ、なら手遅れね」

電話の内容は、「ここ最近私の狩り場付近で悪質な事件が多発しているという警告だった。補導員を装った男が、家出少女などに接近し、「いたずら」をするらしい。未遂も多いが、実際に被害報告も出始めたらしく、この保護者は心配になって電話をかけたらしい。

もちろん、心配しているのは「加害者」の方。私に加害者が近づいたら、無事ではないはずがない。それを保護者はよく判っていた。この学者先生は人間と私達人外の者達とのトラブルを解消する仕事をしている。その為、必要以上に騒ぎを起こして欲しくないのだ。

「大丈夫よ。まだ生きてるわ……えっ？ うーん、どうしようかなあ……」

迷っている振りはしているが、流石にもう脳髓を喰らう気はそがれた。この男達の処分を保護者に任せる事で、私は今後の面倒な事柄を回避する方が得策だと考え始めていた。

しかしだからといって、すんなり引き渡したら面白くない。

「なら、交換条件で……んん、大したことじゃないわ。ちよつと調べて欲しいことがあるのよ」

ちようどいい。私は気になることを一つ……一人、調べて貰うことを条件とした。その人とはもちろん、昼間の男。この誘拐レイプ犯達で満足できなかったから尚更、私の興味は昼間の彼へと完全に向けられていた。顔写真や名前などはいずれ店に来るだろうからその時にどうにかするとして、とりあえずここで約束を取り付けておいた。

さて、次はこのバカタレ達の処分だ。

私は大ざっぱな指示を電話で受け、そして通話を切る。そして携帯を手にしたまま、私は無様に転がっている男達にその携帯のカメラを向け、何枚もの「羞恥写真」を撮りまくった。

妖精学者という立場としては、男達の命に問題が無ければそれだOK、というスタンスらしい。むしろ犯罪者には法で裁けない徹底した「罰」を与えるべきだろうとすら考えている。そこで彼は、私に証拠写真と、ついでに恥ずかしい写真も押さえておいてくれとだけ指示を出していた。私は言われたとおりにメモリいっぱい写真撮る。これをどうするかは……しらない。判るのは、もう私に面倒が及ぶことはなくなるだろうと言うことと、この男達が警察に突き出されること、そして法で裁かれる以上の罰が下されるだろうということ。たぶんこの写真をネットにばらまいたりするだけには止まらない、色んな事をするんだらうなあ……詳しくは知らないけど、あの学者先生を敵に回すのは相当に勇気がいることらしい……別に私は怖がってないけどさ。

とりあえず写真を撮り終え、私はこいつらがプレイで使いそびれた荒縄で縛り上げ、この場を後にした。まもなく、うちの保護者に指示を受けた誰かが「処分」しにくるはずだ。

人間社会にも裏表があるけど、もっと深い裏がこの世には存在する。私のような妖怪の存在もそうだし、それをサポートする人の存在とか。安易に自分達の快樂だけの為に犯罪に走り、あげくこのざまか。運が悪いつて事じゃないね、こいつらは「裏」つてものを知らなすぎたのよ。

むしろ運が良いわ……脳髓吸われなくてすんだんだからね。

まずそんな脳髓に未練はないわ。もう私の思考は、あの虐めがいのある可愛らしい彼へと移っていた。